天知る地知る。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天知る地知る。

【Ｎコード】
Ｎ０１２９ＢＡ

【作者名】
乾　弘毅

【あらすじ】
うちのおばあちゃん普通と違う。なんか不思議能力持ってるくさい。しかも一緒にいるとこっちまで不思議能力身につくっぽい。ちょっと迷惑。でも身内なので偏見はよくない。地に足ついた素朴な考えをモットーに付き合おうと思う。でも勝手に海外逃亡してホームシックでさびしいから大河ドラマのＤＶＤ持ってきてとか言ったらダメでしょ。しかも世界地図にものってない国にどうやって行くのさ…。
不定期更新です。

1。別にイイけどねー。（前書き）

あけましておめでとうございます。
新しい年なので新しい話始めました。

1。別にイイけどねー。

うちのおばあちゃん普通と違う。
とは子供心にも思っていた。
だって普通のおばあちゃんは裏の畑を耕しに行くのに、うちのおばあちゃんは山へ滝にうたれに行ったりする。

それに普段から肉も魚も卵もいっさい食べない。
動物性タンパク質で口にするのは市販のコーヒー牛乳に含まれる牛乳くらいじゃないだろうか？
ちなみに盆と正月とあとなんか知らんけど年に2回くらい行われる怪しげな法事の前1週間は私たち家族も動物性タンパク質が禁止されていた。
ありがたいことに私は肉も魚も嫌いな偏食人間なのでまったく不満はなかった。
13歳のときに育ちざかりにもかかわらず育ちそこなっているチビガリの私を心配してか、「卵は食べてイイよ」と言われたことがあったけど。

それって無精卵だから？ねえねえそういうこと？とかすっごく聞いてみたかったけどガマンした。

うちでは暗黙のルールというか掟というか、おばあちゃんのやってることについて話してはいけない雰囲気があった。

でもどうやらスピリチアルなカンジは隠せてなかった。

おばあちゃんがなんか唱えてると神棚の蝋燭の炎が尋常じゃないくらい燃え上がるし。

その炎が天井に届きそうだったり、ていうかもう届いてるよね、というときも天井焦げたりしないし。
そもそも押し入れよりでかい神棚とか友達の家では見たことないし。

滝へうたれに行くおばあちゃんの荷物持ちに行ったときに「占いするね」となにやら唱えながら習字紙みたいなのを円筒形に丸めて蝋燭の火にかざすと、そのままの形で火のついた紙が燃えながら飛んでいったりもしてた。
おばあちゃんの手からつぎつぎと空に飛び立つ炎の幻想的な映像に感動しつつ、おばあちゃん占い師？とか思ってたこともあったっけ。

そのうち、なんかたまに頼まれてお祓いとかやってるっぽいことにも気づいた。
おばあちゃん霊能力者？って思ったときにはちょっと引いた。
私の勝手なイメージでは、霊能力者というのはいかにもな白装束とかを着てトランス状態に入る姿を全国ネットのテレビクルーに披露するちょっとイタい人種だった。
しかしうちのおばあちゃんは第一村人としてテレビクルーに目をつけられそうなモンペ風ズボンの愛用者だった。

いっかい滝に打たれるときに「ホントは裸で滝に入りたい」と言っていたことはあったけど、コスプレ願望はなさそうでした。

とりあえず、家族として偏見を持つのはやめよう、と地に足のついた素朴な考えをモットーにおばあちゃんと付き合うことにした。
だから山に行くときの荷物持ちも率先してすることにしてました。
だってシンバルみたいな金属製の道具とか入ってるし、そんな重いもの年寄りに持たせてひとりで山行かせるとか孫失格じゃね？と思って。

でもそしたらだんだん霊能力みたいなのが身につきはじめちゃって…。
不意打ちで変な音とか声とか聞こえたり、意識が飛んだりするようなことがあったりするようになった。

それをお父さんにちらっとぼやいたら、一緒に山について行くだけで修行を積んだ形になるんじゃないかと思う、との持論を展開されました。
ＲＰＧで全く攻撃しなかったにもかかわらずパーティーに参加してただけで経験値がもらえちゃうのと似たようなカンジ？

なんでもお父さんが小学生のときは私以上にいつもおばあちゃんと一緒だったせいか、通学路にお化けとか見えて大変だったんだって。あんまり怖くてもう小学校に行けないくらいに重症化したので、意を決しておばあちゃんに相談したこともあったらしい。
その頃も触れてはいけない雰囲気だったけど、だってこれ母ちゃんのせいだよね、と小学生のお父さんは確信していた。
でもしばらくの沈黙のあと、「お化けとかホント存在しないし」とかまるで常識人みたいな返答でごまかされて顎が落ちるかと思ったそうだ。

おばあちゃんにだけは言われたくないよそれ…。

その発言があまりに衝撃的だったせいかその後どうやって解決したかの記憶がないそうであまり参考にはならなかったけど、顎が落ちるかと思った、のくだりが面白かったので許すことにした。

一緒に行くのがマズイのか、と分かったところでいまさら荷物持ちをしたくないとも言えないし。

でも高校受験のとき夜中に勉強をしていたら後ろに置いたラジオからブツっブチっガガガガガって聞こえたのが超絶的に怖かったので私もおばあちゃんに相談してみた。
お父さんの話を聞いた後だったのでどんな返答をされるのか興味あったし。

そしたら、「ばあちゃんなんて先週の大河ドラマの時間に何年も前に死んだ隣町のタバコ屋の婆さんがテレビに入ってきて、息子が勝手に土地を売ろうとしてるからとめてくれってしつこく言うからぜんぜんドラマが見られなかった。すごく楽しみにしてた回だったのに。ばあちゃんに言われてもなにもできんよってちゃんと言ったのに帰ってくれなくて迷惑だった」と延々と愚痴られた。

たしかに、おばあちゃんがタバコ屋さんに電話とかしたら怪し過ぎだしなにもできないよね…。

大河ドラマはＤＶＤになったらレンタルしてあげるね、と約束したら嬉しそうだった。

結論としては、小さい頃のお父さんやおばあちゃんにくらべたらたいしたことないしガマンするわー、と思ったわけだ。

おばあちゃんと一緒にいると、この世の中には確かに科学ではいまだ解明されていない不思議なことがあると思い知らされる。
でもそれが非科学かどうかはわからない。
宗教とか心霊とか無理にスピリチアルな説明をつけようとするから矛盾や誤解が生まれるけど、実は不可視光線や電波と似たようなモノなのかもしれない。

だから、無視することにしようと思った。

考えてもしかたないモノは考えなければイイんじゃないかな、と思って。
おばあちゃんみたいに無視したくてもできないくらい日常生活に不自由がでたら覚悟を決めて向き合ったほうがイイかもしれないけど、そうならない限りは全力で無視することに決めました。

でないとワタシ、白装束でトランスしつつテレビ出演しちゃうイタい大人にうっかりなっちゃうかもしれないと思って。

できれば普通に恋愛結婚とかして幸せになりたいと思っていた。
そして地に足の着いた堅実な日常を手に入れたいとも思っていた。

いま思うと、懐かしくも生あたたかい気持ちになる。

初海外がプライベートジェットとか考えようによっては豪華じゃね、とかポジティブに考えるようにしながらも地に足の着かない飛行機に乗って遠い目をしてしまう成宮ヒトミ１８才でした…。

2。青は空の色ではなかった。

それは水の中にいた。

上を見れば青い空。

その青が、空の色ではなく空までの遠い距離の色であることを確認したくて水の中を旋回すれば、ほどなく湖には大渦がうまれ、それはその勢いとともに翔びたった。

否、翔びたとうとした。

しかし、そうすることは叶わなかった。

それは怒り、水面ぎりぎりから目の前の老婆を責めるように見つめた。

老婆は、湖の端に座り、いたわるように見つめ返した。

「もうすぐ来ますから」

今は老婆の言葉を信じるよりできることはない。

もう一度翔びたい。

あの青を見たい。

飼いならされたような己の現状を壊したい。

そして。

ぞくり、と久しく感じていなかった甘い疼き。
溶けあい、混ざりあうことで生まれる甘い痺れ。
あれを再び味わいたい。

死をひかえた老婆からの最後の贈り物。

…老婆は、孫を呼んだ。
なぜそんなことをしたのか自分でも分からない。
彼女は孫を愛していたし、気に入っていた。
孫の望みがここにないことを知っていた。
だから、一人でここに死ににきたはずだったのに。

あの子は、どうするだろうか？

老婆は空を見上げた。

3。3は意志を伝える。

「いったいあの方は何を考えていらっしやるのか…」
「なにを今さら」
「しかし、この大事な時期に余所者を迎えるなどやはり賢明とは思われません」
「死に際を看取って欲しいのやも知れん」
「それは…」
「 どのみち、迎えはもう向かっている」

冷淡な表情で話を終えた。

ルキアは美しい少女のような顔立ちのせいで、この国の指導者としても最高権力者としても頼りなく思われていることを知っていた。
さらりと肩まで伸ばされた白銀色の髪も、透明な緑色の瞳も、必要以上に紅い唇も、鑑賞するには良いが従うには抵抗があると言われている。

ルキアの美しさは、情報を手に入れる道具としてはしばしば役に立つが、それ以外では今のところ価値がないようだった。

幼い頃から王となるべくたくさんのことを諦め手放してきた。
そのためにも、この度の儀式はなんとしても成功させなくてはならない。

たとえ、不確定要素があっても。

ルキアが見つめる先には、美しい牲贄候補が3人。
湖にはられたまじないを解く祝詞と神に捧げる踊りを練習している。

３は神に意志を表す略式数字。

本来なら１００が望ましいとされるが、人口の少ないこの国から美しい牲贄候補を１００人も用意することは不可能だった。
それに、どうせ何人用意したところで選ばれるのはたったひとり。
牲贄候補のうち神に選ばれ交わりを持った者は神の子となり、ラキアの妻となる。
そうすることで、神をこの国に繋ぎとめる。
誰が選ばれたとしても、そこに愛はない。
王としての務めがあるだけだ。
まして恋など絵空事にすぎない。

…ばかばかしい。
つまらない戯れ言など忘れるべきだ。
たとえそれが、神の巫女の言葉だったとしても。
ラキアは一度だけ頭を振ると執務室に戻っていった。

4。ヒトミちゃんのスーパースキル

受験勉強を邪魔する、オチなし意味なし地味に打撃な超常現象にも負けず、無事高校生になることができました。
あっぱれ。

コタツで眠気に堪えつつ歴史語呂合わせ年号表を唱えてたら向かいの壁にサバンナ（？）見えたりして、まじわけ分からん嫌がらせー、でも無視無視無視、と学力だけでなくスルースキルも身についた受験期間。
この調子なら高校生活も難無く過ごせるだろうとか自信ついたわ。
…ふっ。

ただ、心配事が何もないわけではなく…。

それは、おばあちゃんのこと。

いやね、滝に行ったり占いしたりは別にイイと思うんだけどねー。

…そういえば占いのときに唱えてる歌みたいな呪文みたいなの、これ何語かなー、って耳を澄ませてたらある日突然右耳の斜め後ろ１５センチから自動翻訳されるようになりました。
なんて発音してるのかはいまだに分からないけど、意味だけは分かるというシュール体験。
分かってみたらなんてことない、名前と年と占いたい内容を言ってるだけでした。
例えば、成宮ヒトミ・１６歳・健康、で炎をひとつ飛ばす。
最初に依頼されたらしい知らない人たちを占ってから、私たち家族のことを占うらしい。

ひとりにつき、健康、仕事（勉強）、金運、恋愛、の４つは必ず占う。
恋愛て…。
ものすっごい結果が気になったけど、炎を読み取るまではできませんでした。
…ちっ。
なんか糸で引かれるみたいに空に登って燃えカスも煙りもでないのが１番イイみたいっていうくらいは分かったんだけど、自動翻訳のことは訳あっておばあちゃんにも内緒にすることにしてたのでそれ以上は聞けなかったんだよねー。
自分の恋愛運の炎を真剣に見てたら胡散臭いカンジで見られてたことはあったけど…。

それはともかく。

問題は、お祓い、だと思うのよ。

おばあちゃん、お祓いから帰ってくると尋常じゃなく寝るんだよね。
なんかね、すっかり消耗して帰ってくるの。
これ大丈夫なの？いやダメだろ、ってノリツッコミ入れちゃうくらい。

前からこうだったわけじゃないと思うんだよねー。

やっぱり、年、ですし？

物理的に身体に異常が出たりしないのかな？って心配になる。
それとなく、お祓いはもうイイんじゃないかな？みたいなこと言ってみたりしたことはあったんだけど…。

だって、いくら報酬をもらってるのかは知らないけど、うちの家計はお父さんのお給料とお母さんのパートでまわっている。
おばあちゃんが働く必要なんてない。

でも、おばあちゃんに仕事を持ってくるのは、お父さんのお姉ちゃん、つまりおばあちゃんの娘だ。
たぶん、おばさんはそれで生活してるんだと思う。

そのことで、たまにお父さんとおばさんが大ゲンカする。

でもおばさんは懲りない。
それどころか、私のことを物欲しげに見つめてくるようになった。
こわ。
そんなわけで、私の不思議スキルについて口にするのは自主規制。

代わり映えのない毎日のなか、この調子で今度は大学受験も乗り切るのだ、と思ってたんだけど。

…突然、おばあちゃんが身体の痛みを訴えはじめた。

…。

末期ガンだった。

5。むかしむかし

むかしむかしのことでした。

ある　きたのみずうみに　おおきなさかなが　おりました。

なまえを　こん　と　いいました。

みずうみにすむ　ちいさなさかなたちは　いいました。

あんなにおおきなすがたでは　きけんからみをまもるために　かくれることもできはしない。

まったく　こんは　おろかなさかな。

でも　ちいさなさかなたちには　こんに　さいしょからみをかくすつもりのないことが　わからないのです。

しろく　かがやく　うろこ。

むらさきの　め。

おおきく　つよく　うつくしい　こんには　みをかくすひつようなど　ありません。

こんは　みずうみのなかを　じゆうに　およぎまわりました。

こんは　さむいきせつが　きらいです。

つめたいみずも　きらいです。

だからふゆになると　こんはとりにうまれかわって　みなみのくに

にいき　はるまでをすごすのです。

みずうみを　ぐるぐると　まわり　おおうずをつくると　そのいきおいのまま　とりにすがたをかえて　たかくたかく　とびたつのです。

とりのなまえを　ほう　と　いいました。

こずえにとまった　ちいさなとりたちは　いいました。

あんなにたかくとんで　おちれば　けがするだけでは　すまないにちがいない。

まったく　ほうは　おろかなとりだ。

でも　ちいさなとりたちには　ほうがみているものが　わからないのです。

ほうがみているのは　あお　でした。

そらがあおいのは　そらのいろではありません。

そらまでのとおいきょりが　そらをあおくみせているのです。

だからはるかなそらのうえで　ほうがみるのは　あおでした。

ちいさなさかなも　ちいさなとりも　みずうみも　こずえも　ちじょうはすべて　あおでした。

ある　としの　はる。

ほうは　もどってきませんでした。

ちいさなとりたちは　ほらみたことかと　いいました。
あんなにたかくとんだりするから　そらからおちてしんでしまったにちがいない。

みずうみでは　ふゆのあいだに　こんが　いなくなったきりでした。
ちいさなさかなたちは　ほらみたことかと　いいました。
あんなにおおきなすがたをしてかくれることもできず　ふゆのたつまきにさらわれたのにちがいない。

6。黒から赤へ

腕から抜かれたどす黒い血液が、銀色のボックスの中で酸素供給され、真っ赤になって体内に戻される。

胸が悪くなりそうな光景だが、身体と脳はラキアの精神などおかまいなしにスッキリとしてくるのだからおかしなものだ。

この１ヶ月というもの、ラキアはあまり睡眠を取っていなかった。さらにこの５０時間はいっさい寝ていない。

理由は単純。
時間が足りない。

普段、もっとも暇な時でさえ、ラキアにあてがわれる執務は緻密な調整や計算を必要とするものが多く、地味で成果が見えにくいわりに時間ばかりがかかることが常だった。

今はそれに、儀式についての采配と、客人への接待が課せられている。

客人への接待は、相手によってとはいえ肉体的な接待を求められる場合もある。
すべては、国に必要な情報と投資を得るために。
ラキアの容姿がそれを助けた。

皮肉なものだ、とラキアは思う。
容姿を利用して国に尽くせばそうしただけ、より自分は王の後継ぎから遠ざかるにもかかわらず、王の後継ぎとなるために手段を選ば

ず国に尽くすことを求められている。

とんだパラドックス。

なぜ自分がこんな茶番劇に付き合うのか、ラキアにも理解できない。

緩慢な自殺行為。

１番ピッタリなのはそれだが、肉体はまだまだ死にそうにない。

精神は？

そして魂は？

ピー。

血液への酸素供給が終わった。

精神や魂ならとっくに死んでいる、と思いながらラキアは艶やかに笑った。

これからの６時間は４６歳の石油王の娘を喜ばせて少なくない利益を国にもたらさなくてはいけない。

ラキアは振り返らずに医務室を後にした。

残された医務職員がそっとため息をついていたことを知ることはなかった。

7。海外逃亡

身体が痛い、とおばあちゃんが言い出したとき、お母さんは「六感神経痛かしら？」と言って病院に連れて行った。
半年前に人間ドックを受けて、年相応に健康体、との微妙なお墨付きをいただいていたし、「どこが痛い？」と聞いたら「身体中」と答えたのに熱とか咳とか他の症状がまったく出ていなかったからインフルエンザとかでもなさそうだった。

だから、検査入院することになったと聞いた時には、ご丁寧だなぁとは思ったものの、とくに心配はしていなかった。
だから、結果が出た時には言葉がでなかった。

ガンは、身体中に転移していて、手の施しようがないくらい進行していて、後はモルヒネで痛みを和らげることしかできることがない。

年寄りのガンは進行が遅いといわれていることくらい知っていた。
じゃあ半年前の人間ドックの結果はなんだったの？
たった半年で、新しいガンが、身体中に、手遅れになるくらい出てくる、なんておかしいじゃないか。

でも、それがおばあちゃんのやってたお祓いやなんかのせいなら？
年老いて、命の力が小さくなったせいで、身体に物理的な影響が出たんだとしたら？
なんで私は、もっと早く、もっと強く、止めなかったんだ。

人間である限り寿命はあるし、もしガンでなくても、おばあちゃんの残り時間はさほど長くないかもしれない。
でも、こんなのはダメだ。

おばあちゃんは痛がってる。

モルヒネで朦朧としながら、それでも痛いなんて、そんなのはダメだ。

ある日の放課後、病室に行くと意識がはっきりとしているおばあちゃんがいて、嬉しくなるより怖くなった。
死ぬ直前に意識がはっきりとするなんていかにもなことがありそうで怖くなった。
「ばあちゃん、神様に会いに行きたい」
そう言われて気が遠くなった。
「ヒトミの母ちゃんにばあちゃんがそう言ってるって言って」
それだけ言うと「寝る」と宣言してから寝た。

絶望した気持ちで家に帰ってお母さんにそのことを伝えた。
お母さんは落ち着いていた。
そして1週間後、おばあちゃんがいなくなった。
神隠しのようにいなくなった。

さらに1週間後、おばあちゃんから私の携帯に電話がかかってきた。
「ヒトミ？ばあちゃんだよ」
とびっくりするくらい普通に電話してきた。
「おばあちゃん？！いまどこにいるの？！身体大丈夫なの？！」
「ばあちゃんいま神様のとこにいるよ。日本からちょっと遠いよ。身体は大丈夫。神様のそばにいるからもう痛くないよ。でもたぶんもうすぐ死ぬと思う。でも大河ドラマの続きが気になって死んでも死にきれんからでーぶい持ってヒトミ会いにきてくれる？」

ツッコミどころ満載だったけど、泣くのに忙しくてそれどころじゃなかった。

「もう！どこでも会いに行くよ！でもどうやって行ったら良いの？」
「迎えが行ったから、2～3日で着くと思うし家で待ってて。じゃあばあちゃん待ってる。またね」

電話が切れた後で、よくあるホラーなオチじゃないよね、と着信履歴を見たら見たことないような長い番号が表示されててものすごく不安になった。
半信半疑でお母さんに電話のことを伝えたら、じゃあ準備しないとね、と普通にリアクションされて馬鹿みたいに驚いた。

「お母さん、おばあちゃんがどこにいるか知ってるの？！」
「神様のとこでしょ？なんか南の国らしいよ？世界地図にも載ってない国だって話だけど」
「神様って実在の人物なの？！」
「神様だから人じゃないでしょ。おばあちゃんがお仕えしてる神様のことでしょ？」
「お仕えしてるっておばあちゃんなにしてるの？！」
「なにって、巫女でしょ？あれまさかあんた知らないでおばあちゃんに付き合ってたの？」
「…」

聞いたらいけないのかと思って聞いたことなかったけど、いままで想像したどんな職種より地に足のつかない職業にがっくりしました。
もちろん神社にお勤めなわけじゃないでしょうしね。
しかもおばあちゃんは神隠しにあったわけではなかった。
どうりでみんな落ち着いてたわけだ。
痛いのもモルヒネ漬けにされるのもうんざりなので海外逃亡したそうな。

もうこれ以上はなにを聞いても驚くまい、と思いながら大河ドラマ

好きなクラスメイトにこの間最終回をむかえた大河ドラマのデータをダビングさせてもらいに行くことにした。

8。新たな語彙

まずまっすぐに立ち、ゆっくり大きく腕をまわして頭の上で両手を合わせてから、親指を額に、胸にと順番に触れさせながら下げていき、膝をつきながら両手を離し、両手の親指と人差し指で小さな三角をつくるイメージで地面につけたら、三角の中心に額をつけてお辞儀をする。

これを3回1セットで行わなくてはならない。

まず湖全体に、そして湖の北から右周りに北、東、南、西で湖の中心に向かって、次は湖の北から左周りに北、西、南、東で湖の外に向かって、さらに湖の北から右周りに北、東、南、西で中心に向かって、最後に、もう1度湖全体に向かってお辞儀を行う。

すると、湖にはられた結界の真ん中に穴をひとつ開けることができる。

老婆の開けた穴が塞がる前にできるだけたくさん出したかったので、昆は穴が開くより早く自身の鱗の下から影を出した。
病におかされた老婆が結界に穴を開けるこの作業を嫌がるようになったから、次はないかもしれない。
だから、すべての鱗の下から影を引き出すことにした。

そして穴が開いた瞬間、湖の中心からまるで火柱をあげるように黒い蝶々が噴き出した。

蝶は濡れたような黒い色をしているが、、羽を広げると光を受けて藍色に変わったり、緑色に変わったりする。

そのうちの5羽を老婆の孫のもとへ送り、残りは日のあたらない場所へ隠す。

影から作った蝶は日に当たり続ければ何日も経たないうちに消えてしまう。

だから、少しでも長持ちするようにするにはなるべく日に当たらない場所へ隠しておかなくてはならない。

神殿の中や、森の中。

しかしそれでも昆の鱗の下のように暗くはないから、蝶で蝶を覆うように、自身でも影をつくらせる。

「またずいぶんたくさん…」

老婆が嫌そうに呟いた。

結界に穴を開けて疲れたので神殿に寝に帰ってきたら、ほぼすべての天井に蝶々がびっしりと層をつくるように張り付いていた。

…老婆の寝室にまで。

真っ暗な部屋の中で年老いた目になにがはっきりと見えているわけでもないのだが、厚みを盛大に増した天井がなんとなくうごめいているような気配を感じる。

「…キモい」

孫が使っていた言葉のニュアンスが理解できてしまった。

残り短い人生、できればそんなことわからないままでいたかったけれど。

9。たくさんの人

ラキアの心の中に、部屋がある。

ラキアがそれに気づいたのは5歳の時。
自国の成り立ちと歴史についての講義中のことだった。
先生は、ラキアが集中していないと手の甲を針で刺して注意を促す。
後は残らないが、刺された瞬間は鋭く痛む。
ラキアは先生が怖かった。
その日はいつも以上に集中できず、いつも以上に針を刺された。
痛い。
怖い。
怖い、怖い、怖い怖い怖い…！
恐怖でパニックを起こしかけたとき、頭の中から年老いた男の声が聞こえた。

「変わってやろうか？」

次の瞬間、ラキアの意識は違う場所にいた。
そこはガランとした暗い部屋で、中央にだけスポットライトを受けたように明るい場所があった。
その暗い部屋の、ライトが当たらない場所で、ラキアはラキアの声が先生に質問しているのを聞いた。
声は明るい場所から聞こえてくるらしい。
そっと気づかれないように覗き込んでみると、先生は驚いた様子で、でも的確な考察に基づいた質問に嬉しそうに答えを返していた。
そしてさらにラキアが質問を投げ掛け、先生が返答する。

ラキアはいつものおどおどとした子供ではなく、老成した学者のよ

うな思慮深い様子で新しい知識と考えについて先生と議論をかわしていた。
先生はいつにない上機嫌で、暗がりの中のラキアは驚いたがホッとした。

気がつくと講義は終わっていて、ラキアは先生に頭を撫でられているところだった。
「今日のラキア様は素晴らしい」
それからは、講義のたびに老人が代わってくれた。

それだけではない。

暗い部屋の中にはたくさんの人がいて、ラキアが嫌だと思うことがあるたびに、それが得意だという誰かが代わってくれるようになった。

そうすれば嫌なことが終わるまでを他人事のように見ていることができる。

そしてそのほうが満足する結果となるらしいのを見ながら、ラキアはいつの間にか、こうすることが自分だけでなくみんなのために良いことなのだと思うようになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0129ba/

天知る地知る。

2012年1月14日07時47分発行